

# つながるたねまき、たねあかし こどもみらいフェス とらのまき

～はじめてのフェスづくり～

みんなでつなげる子育ちの和

～フェスから始まる、出会いとつながり～

特別寄稿  
徹底解剖  
ケロポンズの  
ひ・み・つ

笑顔がこぼれるふるさとづくり  
～人にとってのふるさとは、こども時代にある～

自分の責任で自由にあそぶプレイパーク  
～竹の遊具で、のぼろう・すべろう・あそぼう～

ホッとスペース  
～がんばってるお母さんのための～母の手づくりコミュニティ～

★こどもみらいのまち  
こんな町 あつたら サイコー MAP



こどもみらいフェスは続くよ どこまでも



No Play  
No Life

Free  
Children

Let's  
play  
Together

遊びなくして子育ちなし  
子どもに自由を

大人たちも「楽」しくつながろ

# 目次 CONTENTS

## 02 【みんなでつなげる子育ちの和】

～フェスから始まる、出会いとつながり～

文=ながたに睦子 写真=藤吉光恵

## 08 【笑顔がこぼれるふるさとづくり】

～人にとてのふるさとは、こども時代にある～

文=柴田愛子

## 10 【未来に必要な、しなやかな「対話】

～映画「こどもこそミライ」の上映とトークショー～

文=青山誠

## 12 こどもみらいフェスがもたらしたもの ケロポンズ

## 13 フェスにちりばめたたくさんの歯車は

いまも、まわり続けています 文=小磯まゆみ

## 16 子ども みらいのまち ～こんな町 あつたらサイコー MAP～ イラストマップ=まつも

## 18 自分の責任で、自由にあそぶ出張プレイパークが出現！ 文=ながたに睦子

## 24 会場をすみずみまで巡る仕掛け「バルーンアート」

## 26 ステキなアーティストによる未来へのアートワーク

## 28 「コミュニティカフェ」はフェスを耕す場所

## 30 お母さんのための「ホッとスペース」

## 32 子どもたちによる「こぶたのだがっしー」

## 34 パパたちの反省会「まつもデラックス座談会」

## 39 こどもみらいフェス は続くよどこまでも・・・

## 42 【特別寄稿】徹底解剖 ケロポンズのひ・み・つ 文=藍野裕之

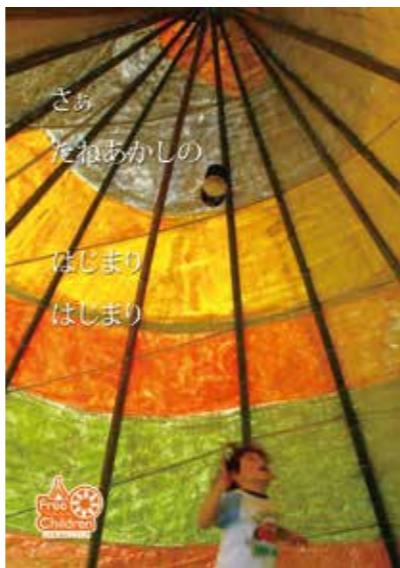
## 46 掲載誌／協賛／アンケート集計／イベントデータ／企画背景／クレジット一覧

●主催：こどもみらいフェスティバル 実行委員会  
本会は、主に横浜市民を対象とし、子育て不安が軽減されるネットワークづくり、子育ちに理解のある市民をはぐくむためのまちづくりに関する事業を開催することを目的としています。

●役員：石飛 智紹・関山 隆一・青山 誠・西田 清美・伊藤 久美子

●委員：奥村 佐知子・丸山 由利子・片岡 恵美子・比嘉 香里・甲斐 琢人・石飛 美郷

●サポーターの皆さん（173名/2014年12月現在）



発行：こども みらい フェスティバル 実行委員会  
編集：石飛智紹  
奥村佐知子  
小磯まゆみ  
編集協力：滝沢守生  
表紙／イラスト：池田仁美（H+D）  
アートディレクション：永島 享  
発行年月日：2015年3月22日  
価値：500円

### ●実行委員会構成団体

■都筑冒険遊び場 まんまるプレイパーク  
『自分の責任で自由に遊ぶ』をモットーに鴨池公園を拠点に活動。設立10周年を迎えた。横浜市次世代育成支援計画推進事業。

### ■りんごの木 子どもクラブ

『子どもの心が育つ保育』をモットーに設立33周年を迎えた未認可保育施設。3施設に1歳親子～未就学児約100人が通う。育児書の発行や専門誌への連載、保育士向けセミナーなどを通じて、保育界では広く影響力をもつ。

### ■NPO法人もななキッズ自然楽校

地域の自然環境の中で、自然体験活動を通じて子どもが主役の保育を行う「森のようちえん」や「学童保育」、海山キャンプ等を通じて自然体験を行う小学生プログラムが充実。

■NPO法人のはらネットワーク 一時保育（ぼっぽ・さんぽ）  
地域で支えあえる子育て・子育ちを目指して、2拠点（一時保育（ぼっぽ・さんぽ））で乳幼児の一時預かりを行う。横浜市乳幼児一時預かり事業の補助事業者。

■保育ルーム・学童保育 どろんこぶた  
英國NCMA認定のチャイルドマインダーが運営する質の高い家庭的保育ルーム。区内の0才から小学校6年生までが通う。秦野市・茅ヶ崎市の保育ママ研修ルームにも指定されている。

YOKOHAMA

# こどもみらいフェスティバル

Free  
Children

子どもに  
自由を

No Play  
No Life

遊びなくして  
子育ちなし

Let's  
Play  
Together

大人たちも  
「樂」しく  
つながろ

「子どもが主役の子育て」「もっと自由に外遊び」を2大コンセプトに  
子どものこと、子育て・子育ちのこと、そして、  
子どもの未来（地球～自然）を考えるフェスティバルです。

このフェスを通して、

子育ての不安が軽くなるようなアドバイスや環境づくり、

子ども自身が育つ力に大人が気付くきっかけづくり、

また親同士がつながりあえる第一歩になればならと思う。

そして、このフェスティバルをきっかけに、子どもに関わる人同士のつながりをさらに積み重ね、

「子育てのネットワークづくり」をめざしていきます。

この企画は保育関連団体や地域社会グループが、

自由参加型の実行委員会を組織して運営し、

地域のご縁でつながった私たち仲間同士が、

できること、得意なことを持ち寄り、サポーター制で実施していきます。

『フェスティバルとはみんなで創り上げるもの』なのです。



# 【みんなでつなげる子育ちの和】

～フェスから始まる、出会いとつながり～

文＝ながたに瞳子

写真＝藤吉光恵



2014年6月21日、記念すべき第一回

「こどもみらいフェスティバル」の初日。私は

北の駅前芝生広場を訪れました。港北「ユ

タウンは洗練されたショップが建ち並び、お

しゃれな家族連れが買い物を楽しんでいる

ようなイメージ。そこでいつたいどんな風に、

子どもが主役のお祭りが繰り広げられるの

だろう……？ と、ワクワクしながら出か

けました。

そして、私が見たのは、なんて楽しそう

な会場のデコレーション。そしてなんて楽しそうな子どもたち！ すぐに目をひいたの

は、会場にそびえ立つ竹のタワー。私の6

歳になる娘も、そのタワーを見たとたん、

キラキラした笑顔でかけだし、さうそくはだ

しでタワーに登ろうとしているのです。そん

な娘を追いかけタワーにたどり着くと、子

どもたちはみな、はだしで競うように、上へ、

上へとよじ登っています。よほどはだしが氣

持ちいいのでしょうか。買い物目当てに連れ

て来られたような、ちよつとおしゃれをした

男の子も、かわいらしいスカートをはいた女

の子も、あつという間に靴を脱ぎ、周りの

子どもたちのまねをするようにして、いつ

しおんめい登っていました。そして、周

りのお父さんお母さんが、けつしてそれを

制止させようとしたり、とがめたりはせず、

自分の子ども時代を懐かしむように見守っ

ていたのがとても印象的でした。



竹のタワーには子どもたちが、つぎつぎに登っていた。大人もちょっと登ったそう？ また、テントの中では、風車をつくるワークショップが行なわれ、完成した風車をうれしそうに見せる娘

外遊びをする子どもは  
自らで遊びを見つけ出す

「おかあさん、見て見てー！ すごいで  
しょー！」とタワーの上から声をかける娘に  
手をふり、会場をぐるっとひと回りしてみ  
ることに。

広場にはアウトドアブランドのテントが並  
び、その中では楽しそうなワークショップが  
開かれています。竹で有名な都筑区なら  
ではの、竹の風車づくり、竹からつくった紙  
にお絵描き、竹箸づくりなど、竹を素材に  
したさまざまなワークショップをはじめ、け  
ん玉教室やディスクゴルフ、移動紙芝居や  
さんなど、子どもが楽しめそうなブースが  
あちこちに見られました。

そして、どこを見ても笑顔で遊ぶ子ども  
たちでいっぱい！ ときどき、近所の公園な  
どで遊んでいる子どもたちを見ていると、  
それぞれが持参したゲーム機などで遊んで  
いる姿を見かけ、ちょっと残念な気持ちにな  
るのですが、ここでは、そんな子はひとりも  
見かけませんでした。

どこを見ても笑顔で遊ぶ  
子どもたちでいっぱい



会場ではさまざまなワークショップが展開され、参加した子どもたちの歓声がこだまするとてもにぎやかな2日間となった。小学生から幼児まで、大人も子どもも楽しんだ



## 日ごろからがんばっている お母さんによるラックスしてもらう

子どもたちのための企画を、子どもたち自身が考えて運営する。お母さんはまた、お母さんのための企画を考える。それぞれができることを持ち寄るのがフェスティバル



いると、子どもというのは、何もないところから自ら遊びを見つけて出す本能があり、そしてそれは、遊びの素材がたくさん転がっている外遊びで、とりわけ發揮されるのではなくと、芝生をかけ回る子どもたちを眺めながら思いました。

### 子育て中のお母さんのための ホッとスペース

ふと、娘の「お母さん、あれ欲しい！」との声に、指さす方を見てみると、すぐそばのホールから出て来る子どもたちがみなかわいいバルーンアートを持つているのです。

そのバルーンアートに誘われるよう私たちは親子もホールの扉をくぐると、またそこも子どもたちであふれていたのです。ホールの中は、外の広場とはまた違った雰囲気では

ホールで気になったのは「ホッとスペース」と名付けられた、ボランティアのお母さんたちによるハンドマッサージやミニ整体、タロットなどのコミュニティブース。これらのブースは、日ごろ頑張っているお母さんたちにラックスしてもらうことはもちろんのこと、子育てについておしゃべりをして、少しでも気分を和らげて帰つて欲しいというハートウォーミングな目的があつたと聞き、なるほどなあと、深くうなずきました。

未就園、未就学児を抱えた子育て真っ最中のお母さんたちというのは、子どもたちからたくさんのエネルギーをもらしながらも、日々、悩みや戸惑いの連続だと思ひます。特に初めての子育ての場合、インターネットや雑誌の情報を見ては一喜一憂したり、自分の子育てはこれで良いのか……と思ひ詰めてしまつたり。私もまさにそんな経験を



してきました。子育ての悩みを笑つて話せる友人がそばにいれば良いのですが、そういう環境にいない人もたくさんいると思います。

そういう人にとって、子育て経験がちょっと先輩のお母さんたちが、ちょっと声をかけて、優しく手をとり、雑談を交え、日ごろの子育ての悩みを聞く、ただそれだけで、どんなに心強いかと思います。私自身、子育てに悩み、泣きたくなるような事が続いたときには、子育て中のお母さん同士でちょっと会話をしただけで、ふつと心が軽くなったり経験が何度もありました。たとえ何気ない会話でも、人と言葉を交わすということは、思つている以上に人の心を和らげる力がある。それは、子育てをしながら日々感じていることのひとつです。そしてこの日、「ホッとスペース」に立ち寄つて、心が軽くなつて帰つていつたお母さんが、きっとたくさんいたのではないでしようか。

### 愛子先生の笑顔とお話で 肩の力がふつと抜け 元気をもらう

さて、フェスの2日目、あいにくこの日は朝から小雨がシトシト。「こんな天気じゃ、昨日みたいにはじけた子どもたちの遊ぶ姿は見られないだろうなあ……」と、閑散とした広場を思い浮かべながら出かけると、なんと広場ではレインコートと長靴で、昨

日と同じように力いっぱい遊ぶ子どもたちの姿が！ 水たまりでバシャバシャと飛び跳ねてみたり、珍しいシャボン玉づくりに夢中になつてしたり……。子どもたちの遊びにとつて天気なんて関係ないんだなあとあらためて感じさせられました。

この日は、お目当ての柴田愛子先生の講演会。愛子先生は終始笑顔で、今までご自分が見てきたおおぜいの子どもたちのエピソードを、おもしろおかしく伝えつつ「子どもには自分で育つ力があります。お父さんお母さんは子どもの育ちを信じて、子どもに寄り添い、今をありつたけ生きている子どもたちを、見守つてあげてください」

天気は初日が晴れ、二日目は朝から小雨が降っていました。でも、子どもにとっては雨なんか関係なし。雨ならではの遊びもつぎつぎうまれました



ありましたが、端切れや段ボールなどでつくるクラフトアート、アウトドアブランドによるぬり絵Tシャツ、クレヨンハウスの雑誌「クーヨン」による絵本選びのアドバイスなど、ここでも楽しげなワークショップがたくさん行なわれていたのです。

ホッと空間になったのは「ホッとスペース」と名付けられた、ボランティアのお母さんたちによるハンドマッサージやミニ整体、タロットなどのコミュニティブース。これらのブースは、日ごろ頑張っているお母さんたちにリラックスしてもらうことはもちろんのこと、子育てについておしゃべりをして、少しでも気分を和らげて帰つて欲しいというハートウォーミングな目的があつたと聞き、なるほどなあと、深くうなずきました。



## 出会いとつながりを大切に 子どもたちの未来を紡ぐ毎日へ



というメッセージを伝えてくれました。そん

な愛子先生の言葉に、会場の大人们は「う  
ん、うん」と強くうなずいたり、ときには

隣同士顔を見合わせて笑いあつたり……。

この日、愛子先生の笑顔とお話を力をもつ

て帰った人は、たくさんいたことでしょう。

講演会が終わり、サンクスに並ぶお母さ

んたちと談笑する愛子先生の姿を目とした

とき、ふと記憶が一年前の冬にさかのぼり

ました。その日私は、日野市のプレイパー

ク「なかだの森」に娘と出かけていたのです。

友人から「どうでも良い講演会があるから、

ぜひ聞いてみて！」と誘われることで、そ

のときの講師こそ、柴田愛子先生。それが、

私と愛子先生の初めての出会いでした。そ

の日、愛子先生の温かい笑顔と優しい語り

にすっかりファンになってしまった私は、やは

り、この日のサンクスのときのように、愛

子先生からかけてもらった言葉で、肩の力

がふっと抜けといったことを、昨日のことの

ように思い出したのです。

そして、いつかまた愛子先生に会ってお話

を聞きたい、そんな思いを抱いたまま月日

が経ち、縁あって「森ノオト」のライター

として「りんごの木子どもクラブ」や「こ

どもみらいフェス」の取材をし、子どもの育

ちに関わる人々にたくさん出会い、たくさ

んの話を聞くことができ、あらためて自分

の子育てを立ち止まり、振り返る機会を与

えてもらったのです。その人々との出会いは、

6歳と1歳の子育て真っ最中の私にとって、

どれほどありがたかったことでしょう。そし

て、みんなが口をそろえて言なことは、「子

育てはひとりでするものではない」というこ

とです。その言葉に私は本当に助けられて

なんとなく駆前を歩いていたら楽しそう

に遊ぶ子どもたちの姿に引き込まれ、親子

ともども足を止め、気づけば夢中になつて

いました。そして、うちの子つてこんな風に力

いっぱい遊べるんだ！ 子どもって、何もな

くても遊びを生み出す力をもつているんだ！

そんなことを感じた大人たちも多かつた

のではないでしょうか。

また、各地から応援に駆けつけたとい

うえボランティアスタッフが集まると聞い

て驚きました。会場には、このフェスを企画

した、たくさんの大人たちの笑顔があり、

子どもたちが自由に力いっぱい遊べる環境

を、大人たちが協力してつくり出している

ことに、素直に感動し、ここにも「子育て

はみんなでするもの」というメッセージがこ

められているのでした。

二日間かけて、子どもと大人のはじけ

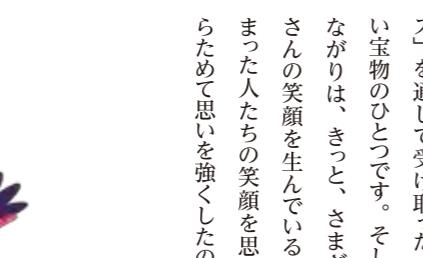
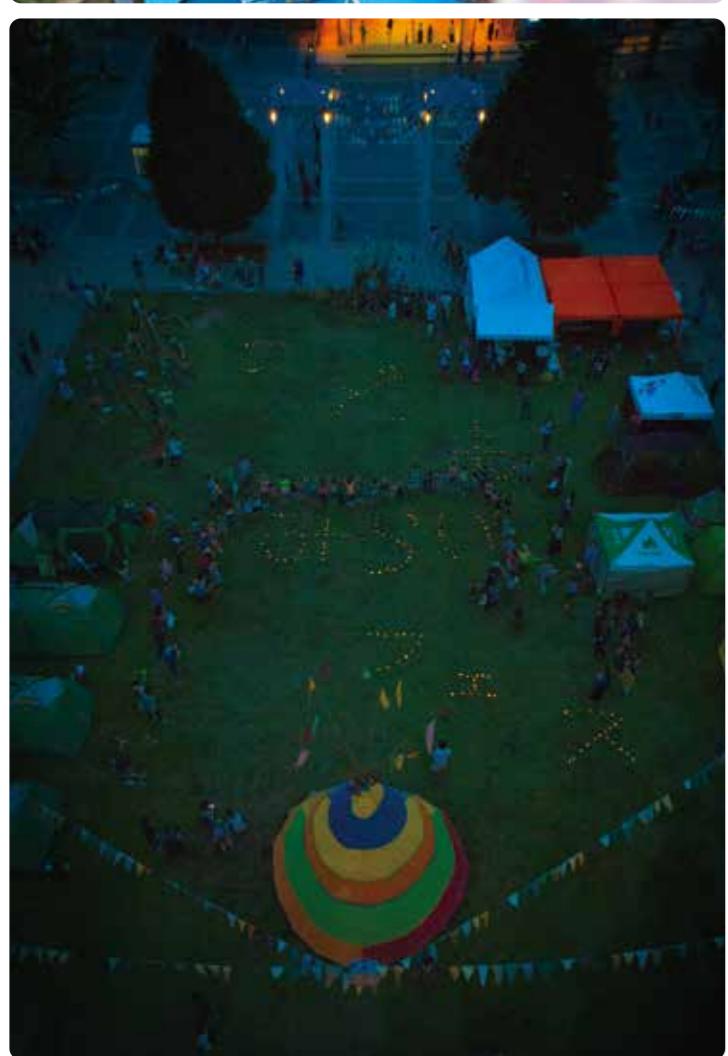
る笑顔と笑い声に包まれたフェスの会場。こ

こで生まれた笑顔はこの日だけに留まるこ

とはないでしょう。



しゃぼん玉ワークショップやけん玉、バーコマ、紙芝居など、懐かしい遊びに夢中になる子どもたちの姿がとても印象的でした。子どもはやっぱり遊びの天才です



ながたに睦子／「森ノオト」ライター

町田市在住。野山や虫が大好きなでやんちゃん2008年生まれの長女と、2013年に生まれたばかりの次女の育児に奮闘中。2010年に引っ越してきてからは、親子で四季折々の里山歩きやキャンプなどを楽しんでいる。珈琲焙煎が趣味の域を超えた夫と、カフェをするのが夢。イラストレーターとしても活動中。子どもや自然のモチーフを中心に、日常の風景などを描いている。



どもみらいフェスでお会いしましたよね  
……？」なんて、そんな会話が生まれるう  
れしい光景も、きっとどこかで繰り広げら  
れていたのではと、想像を巡らせました。  
このフェスは、子どもの育ちに関わる大人  
たち、そして今まさに育とうとする子ども  
たちへの確かなエールになったことと思いま  
す。そしてこのフェスをきっかけに、育ちあ  
いの輪が広がり、そこで出会った人と人がつ  
ながり、また笑顔が生まれ、そして次は、

またどこかの街で同じ趣旨のフェスが行なわ  
れる……。そんなことを願つてこのフェスは  
企画されたのではないでしょう。「出会い  
とつながり」これは、私が「どもみらいフェ  
ス」を通じて受け取った何物にも代え難  
い宝物のひとつです。そしてその出会いとつ  
ながりは、きっと、さまざまな場所でたく  
さんの笑顔を生んでいるのだと、あの日集  
まつた人たちの笑顔を思い出しながら、あ  
らためて思いを強くしたのでした。

# 【笑顔がこぼれるふるさとづくり】

「人にとつてのふるさとは、こども時代にある」

文＝柴田愛子

イベント2日目、プレミアホールにて「りんごの木子どもクラブ」の代表でもある柴田愛子さんの講演会を開催しました。講演会のチケットは、事前に完売してしまうほどの反響で、残念ながら当日聞けなかたも多かったのではないかでしょうか。当日は、愛子さんの講演をはじめ、特別映像版・絵本『けんかのきもち』、『ありがとうのきもち』の読み聞かせや、質疑応答も行なわれました。講演会の参加者は257名。そこで、愛子さんから、イベントに参加してみて感じたことを寄稿していただきました。



6月21日、快晴！

『こどもみらいフェスティバル』が催される港北ニュータウンの会場に出向きました。

え?! ギョッ?! すごい人、人、人。子どもがうじゅうじゅう。いったいどこから湧いて出てきたのだろうと思うほどの子どもと大人たち。

いつもの港北ニュータウンはおしゃれな、どこかすました街。それが、広場はみごとに子どもが遊ぶお祭り状態。竹で組まれたジャングルジムには、子どもたちが空の青さに負けないくらいの笑顔で、空へ届きそうに登っている。竹をノコギリで真剣に切っている幼児の脇で竹をおさえている大人がいる。けん玉にされながら子ども時代を過ごしているように見えるのです。本来は何より大事な自分なのに、自分で自分を好きにはなれない状況をつくってしまっているような気がするのです。

今の子どもだって、私たちと同じくらいには力があるのです。そのことに気づいてもうために「子どもの心に添つてみると、子どもの力を信じて欲しい」と願っているのです。

あつた時代です。  
道路が舗装され、家には堀が建てられ、電化が主婦の労働を楽にしました。いつのまにか、近くにはコンビニや総菜屋もでき、駅の周辺にはおしゃれな店が建ち並び、エレベーターのついたマンションに住む人が多くなりました。「まるで外国みたい」な、きれいな日本になりました。

なくなつたのは子どもたちが群れて遊ぶ姿です。大人の価値観を幼いころから教えられ、迷惑をかけない子が「いい子」と評価され、若い親たちを「いい子育て」と追い詰めていきます。やがては成績がそのままの評価になります。塾が乱立しています。公園は子どもたちが大人に監視をされながら遊ぶ場所になります。少子化も相まって、子どもが本來の子ども時代を過ごせなくなつたと言つても過言ではないと思います。少なくとも、私の子ども時代にあった自由な時間と空間は、比べものにならないくらい少なくなつたと思います。もはや子どもを子どもとして放つてはおけない時代になつてしまつたのです。

いま、私は「子どもの心に添う」ということをあちらこちらで話しています。子どもの気持ちに寄り添つてみようよ。子どもの心が見えてくる。子どもは案外ちゃんと感じ、考えている。子ども自身が育つ力を持っていると言つています。本来ならば、こんなに子どもの心を見ようしなかつたつていいのです。でも、子ども本来の育ちを忘れて、お

金を掛けてプロに託し、効率よく、安心な将来を得ようとしきりにいるのを感じるので

す。頭と口で子どもは育ちません。心も体も無傷で光ることはないのです。ありのままの子どもを「よし！」としない親や地域や学校の大人たちの間で、子どもたちが押しつぶされながら子ども時代を過ごしているように見えるのです。本来は何より大事な自分なのに、自分で自分を好きにはなれない状況をつくってしまっているような気がするのです。

今の子どもだって、私たちと同じくらいには力があるのです。そのことに気づいてもうために「子どもの心に添つてみると、子どもの力を信じて欲しい」と願っているのです。

私の住まいから歩いて20分くらいのところに多摩川があります。幼いころ、毎日のようになります。それは、場所だけではなく、そこで過ごした子ども時代の思い出なのです。

『人にとつてのふるさとは、子ども時代にあります。思い出すとほとができる、そんなふるさとづくりをしていきたい』  
こんな思いを強くしたフェスティバルでもありました。

## 保育をしてみて



どんな子が来るのか、ワクワクドキドキを抱えつつ、どんな子もその子の時間として過ごせるようにな! と精神統一……せっかく、一時保育に来た子どもたち。ただ親を持つ時間ではない、その子のステキな時間として過ごせますように。

それには、私たち大人は子どもの気持ちに寄り添つて、共感しながら、無条件に受け止めることが大切です。

当日は、親と離れて悲しくて寂しくて泣いている子、怒り泣いて抱っこも嫌がる子、見知らぬ場所、大人の中で緊張かショックか、微動だにしない子、好きなおもちゃを見つけてすでに楽しんでいる子……私たち一人一人違う反応に、寄り添い、共感します。

そうしていると、子ども自身が今の自分や状況を受け入れ始めます。そして、側にいる私たち大人に気付いて、受け入れてくれる。

その子どもの心が動くその瞬間を見逃さなければ、あとは子ども自身が環境に働きかけていき、どんどんその子の世界が広がっていきます。そうしたらもう私たちは仕事半分終わつた感じです。そんな自分の時間を過ごしていたら、あつという間にお迎えです。

愛あふれる愛子先生と子育ての世界を共感し合つたお父さん、お母さんたち。なんかいつもよりお母さん優しいぞ。あら、うちの子こんなにたくましかったっけ? そんな再会をするご家庭を見送つて終わつた一時保育でした。

(一時保育さんぽ 燕昇司知里)

### 【講演概要】

柴田愛子 先生 講演会  
『ママがホッとする子育てアドバイス』  
～こころが軽くなる子育てのススメ～



子育ての情報がたくさん入ります。「正しいのはどれ?」公園やひろばで同じような年の子どもたちを見かけます。「うちの子は早い?」「遅い?」「大丈夫?」日々、不安を抱えて育児していませんか? 「何かしなければ」「がんばらなければ」と、あせつて育てようとなればなるほど、子どもはうまくいきません。

じつは、親が育てるより、子ども自身の育つ力の方がずっと大きいのです。ちゃんと人間の子として育つ能力を持って生まれてきているのです。子どもたちのエピソードを通して、子どもの育ちをお話ししたいと思います。そして、親の役割についても語ります。

日時：6月22日(日) 10:00開場/10:30開演~12:30終演  
会場：プレミアヨコハマ・ホール  
料金：おとな500円（子ども同伴は可能ですがお席はございません）

### ■保育募集要項 ■

柴田愛子講演会時の保育託児を下記のように受け付けました。講演会場そばの「もあな保育園」にて、講演時間の前後30分以上の余裕をもって、原則満2歳以上の未就学児を有料でお預かりしました。メールとFAXのみで受け付け、定員に達し次第終了としました。保育託児は24名でした。

また、当日講演を聞くことができない保育を行なう担当者に向け、愛子さんの講演会を事前に開催しました。

\*参加者35名（5月10日@りんごの木にて開催）

### 【プロフィール】

柴田愛子（絵本作家/保育者/りんごの木子どもクラブ代表）

都筑区内3施設に1歳親子から未就学児約100人が通う未認可保育施設「りんごの木 子どもクラブ」代表。1982年からの設立主旨「子どもが主役の、子どもの心が育つ保育」を実践するかたわら、育児・保育雑誌などに寄稿、育児書も手がけるほか、子育て支援広場や保育園・幼稚園・小学校など全国各地での講演、保育土向けセミナーなどを通じて広く影響力をもち、保育界の加藤登紀子の異名を持つ。40年におよぶ保育経験に裏打ちされた強い信念と優しい言葉は「第二の実家」として父母の育ちをも支えている。保育での実話を絵本にすると絵本作家でもある。『けんかのきもち』は日本絵本大賞を受賞。

◎絵本：

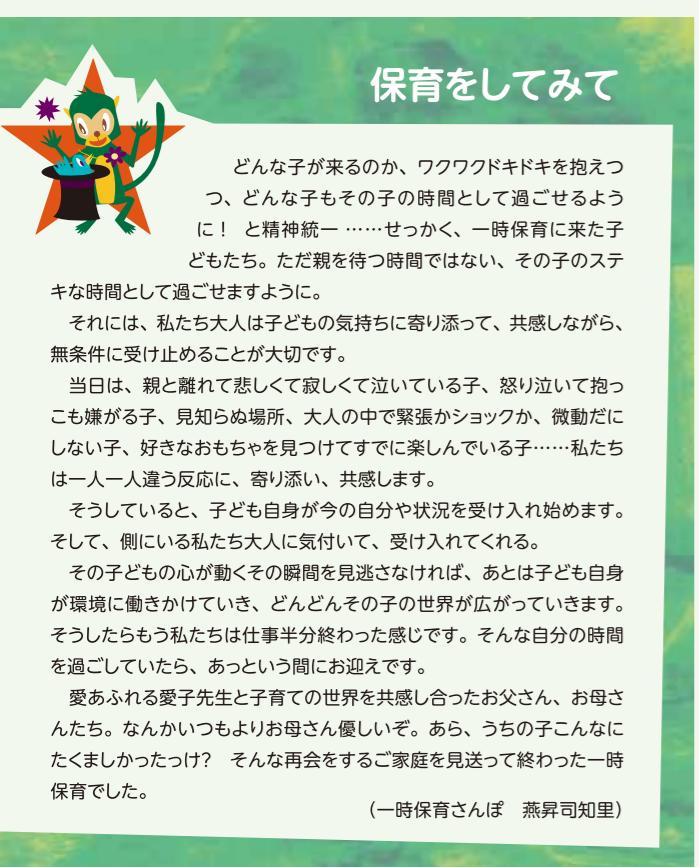


『けんかのきもち』  
(ポプラ社刊)



『ありがとうのきもち』  
(ポプラ社刊)

◎育児書：『お母さん、それは叱ることではありません～大人の正解と子どもの本音～』(PHP研究所刊)、『子どもの「おそい・できない」が気になるとき』(学陽書房刊)



# 「未来に必要な、しなやかな「対話」」

～映画「こどもこそミライ」の上映とトークショー～

文：青山誠



「じどもみらいフェスティバルでは、ドキュメンタリー映画「こどもこそミライ～まだ見ぬ保育の世界～」を上映しました。上映後にはトークショーを開催。監督の筒井勝彦さん、森のようちえんピッコロの中島久美子さん、そして、りんごの木からは柴田愛子さん、青山誠さんが登壇。映像に映りきらなかった子どもたちの様子や保育者の想い、そして監督からの視点などが語られました。そこで、りんごの木の保育者でもある青山さんに、「対話」という切り口から、トークショーを振り返ってもらいました。

この映画を制作するにあたって、筒井監督からこんなお話を聞きました。

保育界ではそれぞれの園が実践に励んでいますが、園を越えての対話はあまりない。この映画には3つの異なる保育実践がオムニバスで映っているが、ぜひそれぞれ「違う」ことをひとつきっかけにして「対話」が始まるといふと思っています、と。

この指摘はある意味で当たっているし、ある意味では外れている、とぼくは思います。外れているというのは、保育の世界では実践を披露し合いディスカッション交わす会は、じつは豊富にあるからです。

しかし、その「対話」がいつでも建設的か

と言えば、そうでもありません。ともすれば考え方の違いや方法の違いをお互いにあげつらうだけで終わってしまいがちです。「違う」ことが当たり前の各実践間の対話が、「違う」点をあげつらうだけという、なんとも寒々しい光景が絶えません。保育実践の間に「対話」がない、というのは「質」の点においてはまさにその通りの指摘だと思います。

さて、じどもみらいフェスティバルにおける、映画の上映後のトークショー。そのなかにおいて、じつはとても興味深い「対話」がなされていました。

森のようちえんピッコロの中島久美子さんから子どものケガにまつわり、「かわいそう

## ドキュメンタリー映画 「こどもこそミライ～まだ見ぬ保育の世界～」

<http://kodomokosomirai.com>

今すべての大人に贈る、泣いて笑ってちょっぴり切ない。子どもたちの園での日常を追いかがる新しい保育のかたちを問うドキュメンタリー映画です。本作に登場するのは、横浜にある「りんごの木」、山梨の森の中にある「森のようちえんピッコロ」そして、大阪の「保育所 聖愛園」と、本作に登場する3カ所の保育施設では定められた既成のカリキュラムにとどまることなく、子どもを主役とした、子どもに寄り添う独自の幼児教育を実践しています。それは「人を育てる」というテーマに真摯に向き合った情熱にあふれ自信に満ちた保育です。ユニークで個性的な保育を展開しているこの3園のありのままの日常の暮らし(生活)を通して「子どもは本当は何を望んでいるのか、おとなたちは子どもに何をすべきなのか」を感じとって下さい。

監督：筒井勝彦  
(小学館「新幼児と保育」編集部企画／84分)

6月22日(日)  
18:00開場／18:30開演～20:30終演

料金：  
●大人1000円  
●中学生以上～大学生500円  
●小学生以下無料  
(同伴は可能ですが、席はございません)

## 「すばらしき子どもの世界」

### 監督 筒井勝彦さんからのメッセージ

いまこの瞬間をありつけた力で生きている子どもたちの姿を“見て 感じて 体感して”いただくことで、保育者はもちろん、多くの大人たちが子どもたちと真摯に向き合い“子どもの未来”を考えるきっかけになることを祈りながらこの映画を製作しました。

この映画でほんとうにお伝えしたいことは、ここで取り上げた保育が良いとか悪いとかではなく、もう一度、子どもを原点にして“人を育てる”とはどういうことなのか考えていただきたいということです。

“子どもが子どもらしくあるために”いま私たち大人がすべきことを一緒に考えてみませんか?

つぎは、われわれ大人たちが、りんごの木の子どものミーティングさながらに話し合う番です。



その場はそれで終わったのですが、トークショーやの翌日、柴田から「中島さんにメールを送ったのよ」と教えられました。中島さんは「かわいそう」という言葉がありました。それに対しても「かわいそうじゃないわよ」という切り返し。子どもがケガをしたことがかわいそうかどうか。言葉のニュアンスの違い?いやいや、考え方の違い?横で聞いていて、ぼくはあれこれ興味深かったです。もちろん、どちらが良いとか悪いとかという話ではありません。

その場はそれで終わったのですが、トークショーやの翌日、柴田から「中島さんにメールを送ったのよ」と教えられました。中島さんは「かわいそう」という言葉がありました。それに対しても「かわいそうじゃないわよ」という言葉がありました。それに対しても「かわいそう」という言葉がありました。それに対しても「かわいそう」という言葉を乱発するのが気になっていたので、ぱつと反応したのだと思う、と。

この話を聞いて、ぼくは演出家の宮本亜門さんの言葉を思い出しました。宮本さんは対話をしながら舞台をつくり上げていくそうで、対話において一番大切なのは「沈黙」である、と言っています。宮本さんは出演者たちと対話をしながら舞台をつくり上げていくそうで、対話の後、それぞれが帰り道につきながら、一人で考える、その沈黙のときこそ個々人が深まっていくときなのだ、と。あの人はああ言っていたけど本当はどう考えていたのかな。あのときはあんなふうに言ってしまったけど少し言い過ぎたかも……などなど。

子どもの未来は、子どもの隣にいる大人たちの対話があることで豊かになっていく。ぼくはそう信じています。その対話がしなやかであればあるほど、子どもたち一人ひとりの声にぼくら大人がもっと耳を澄ましていけるようになると思います。その対話がしなやかであればあるほど、多様な子どもたちに多様な環境が保障されていくであろうことは、言うまでもありません。

【トークショー出演者プロフィール】

監督：筒井勝彦

オフィスハル代表。日本映画監督協会会員。主な作品に、「無垢なモノ - my simple things -」(2006・ゆうばり国際ファンタスティック映画祭正式出品作品)、「風のなかで - むしのいのち くさのいのち もののいのち -」(2009・文部科学省選定作品)「こどもこそミライ～まだ見ぬ保育の世界～」(2013)。

森のようちえんピッコロ：中島久美子

森のようちえんピッコロ代表。幼児教育家。東京・横浜・山梨県内の幼稚園・保育園に勤務後、「時間に追われる事なく、子どもと向き合う保育をしたい」と、「森のようちえんピッコロ」をお母さんたちと立ち上げる。「想像以上に子どもはすごい!」と驚きの毎日。小学館雑誌『3,4,5歳児の保育』2010年2月号の第45回「わたしの保育」において保育での出来事を綴った「動物の死」が大賞受賞。

りんごの木子どもクラブ：青山誠

りんごの木保育者。第46回「わたしの保育～保育エッセイ・実践記録コンクール」大賞受賞。著書に、繪本「あかいボールをさがしています」(小学館)「子どもたちのミーティング～りんごの木の保育実践から」(共著・りんごの木)「言葉の指導法」(共著・玉川大学出版部)



# こどもみらいフェスがもたらしたもの

ホールでは子どもたちに大人気のスーパーデュオ、ケロポンズによるコンサートがおこなわれました。コチラのチケットもうれしいことにSOLD OUTとなってしましました。参加することができなかつたみなさん「ゴメンナサイ。笑いあり、歌あり、遊びあり、体操ありの歌って踊れる本当に楽しいコンサートでした。「虹」「見花山へ行こう」などおなじみの曲はもちろん、動画サイトで800万回以上の再生回数を誇る「エビカニクス」もライブで披露。まさに会場は笑いと興奮に包まれました。そこで、ケロポンズにフェスに参加した感想を寄稿していただきました。



あふれでる笑顔とはじける幸せ感、ああ、  
こどもたちって本来こうなんだ、やりたいよ  
うにやりたいことを思いつきりやつたら、ここ  
ろも体も満タンになる、そうしたらこんなふ  
うになるんだあ——!!!

わたくしたちのコンサートは「こどもみらい  
フェス」の最後イベント、つまりその日、一日  
めいっぱいあそんだ子どもたちがあそびにき  
てくれたわけね。

音楽に合わせてひたすらクルクル回り続け  
る子、ジャンプする子、わたしたちに話しか  
けてくる子、大笑いしてともだちにくつく  
子、それぞれのエネルギーでそれぞれの楽し  
み方をしてくれていました。ありがとう、子  
どもたち。そんな子どもたちのそばにいる大  
人たちの温泉に入った後のようなやわらかな  
顔、これも忘れられない。

わたしたちのコンサートは「こどもみらい  
フェス」の最後イベント、つまりその日、一日  
めいっぱいあそんだ子どもたちがあそびにき  
てくれたわけね。

めいっぱいあそぶ子どもたちを見ていた大  
人たちの幸福感、これもやっぱり「こどもみ  
らいフェス」の産物かもね。子どもって楽し  
ければどんどんあそぶ生き物であり、大人っ  
てそれがうれしい生き物なんですね。この空  
気感が日本中、いや世界中に広がつていけば  
いいなあって心底思ったフェスでした。

おっと、ケロポンズもそんな親子に寄り添  
えるグループでありたい。  
そして、やはり最後に言つておこう。  
ありがとうございます!!

ケロポンズ（増田裕子 平田明子）

P42 「徹底解剖 ケロポンズのひ・み・つ」へ



## ケロポンズ

～唱って踊れる・はっちゃん親子コンサート～

6月22日（日）15:00開場／15:30開演～15:30終演

会場：プレミアヨコハマホール

料金：  
●中学生以上～大人1,500円  
●3歳以上～小学生500円（歌って踊れるコンサートのためイス席はございません）  
●2歳以下無料／同伴化（お席はございません）

■ケロポンズの情報は「カエルちゃんネット」で検索を  
公式サイト <http://www.kaeruchan.net>

## フェスにちりばめた たくさん歯車は いまも、まわり続けています

文=小磯まゆみ

今回のこどもみらいフェスでは、企画、準備、当日の運営に百人以上のボランティアスタッフが関わった。講演会、コンサート、映画上映のほかにもプレイパーク、「ワーカーショップ」、カフェ、ほっとスペース、協賛企業のブースもある。仕掛け人は石飛智紹さん。この企画の言い出しちゃペである。行政や企業の企画ではなく、地域の住民が手弁当で、この地域で子育てに関わる人たちのつながりを呼びかけ、フェスを成功させた。その経緯と思いを、石飛さんにうかがった。

### ニュータウンでの子育ては、 けつこう大変

（街や道路をあそび場に変えて、子どもの遊びを考えよう、という試み）。その後の飲み会で、この街でも、子どものあそび、とにかく外あそびの大切さを伝えていきたいよね。という声が上がって、それが今回の「こどもみらいフェス」につながった、というわけです。じゃあ、このメンバーがこの街でフェスをやるとしたら、何をやる？ となつたときに「とにかく柴田愛子さん（以下あいこさん）の話をたくさんの人人に聞いてもらいたい！」という声が強かつたんです。



講演会に来て、話を聞いて、帰る。  
そんな個人的経験で終わらせてほしくない。  
だからとおしゃべりして、共有して帰つてほしい。  
そのために、いろいろな仕掛けをちりばめました。



「子育てって、けつして能率的じゃない。本来、  
でも、残念なことに、この街であいこさんの  
話をじっくりと多くの人が聞く機会は意外  
と少ない。港北ニュータウンには、多くの子  
育て世代が集まっていることもあってか、さま  
ざな教育や習いごとの情報であふれてい  
る。そのなかでも気になるのは、早期教育や  
能力、能率主義の教育だ。

大小のさまざまな歯車がかみ合いながら、みんなでつくりあげるのが、この、こどもみらいフェスなんです。

自分だけじゃなく、

誰かとつながることで、

歯車は組み合わさっていく

次の歯車へつながっていく。



場所も決まり、ケロボンズのコンサートや、映画会の上映、トークイベントなど、大きな柱となるイベントが決まっていく。外である。フェスを知りつくした石飛さんならではの仕掛けが、今回の「こどもみらいフェス」を単なるイベントで終わらせず、自由で、しかも一体感のある雰囲気をいくつ出し合っている。

親子で楽しめるワークショップもどんどん決まり、「こどもみらいフェス」の原型がつくら

れていく。石飛さんは、「フジロックフェスティバル」の運営にも関わっているアロでもある。フェスをやりつくした石飛さんならではの仕掛けが、今回の「こどもみらいフェス」を単なるイベントで終わらせず、自由で、しかも一体感のある雰囲気をいくつ出し合っている。

自ら育つ力をもつていてるんだから!」

うるさい、汚い、と苦情を言われてへこんで

いても、「だって、子どもがいきいき生活するつて本来

かよわせているので、あいこさんの話は何度も聞いています。その話しぶりは、とても説得力がある。「子どもは信頼して見守ってくれる人がそばにいれば、自ら育つ力を持つている」と、子どものエピソードを通して、エネルギー的に話してくれるんですね。現代の親の抱える、子育ての難しさもわかつてくれる、その悩みにも单刀直入に答えてくれる。

これがまた、ボリシーがしっかりと書いてゆるぎない。单刀直入に言っちゃうと「近所の昔風な井戸端会議のなかで、子育てベテランのおばちゃん」みたいなんです。

「社会やおとのな都合にあわせて、子どもを枠にはめようとしていない? 肩の力を抜い

やつぱり、あいこさんの話を、この地域の住むたくさんの人たちに聞いてもらおうよ

……。そうしたら、この街の子育ての風景は、もっと自由な雰囲気にかわるかもしれない!

どうせやるなら、大々的に! たくさん要素をちりばめて! となつたわけです」

大人がたのしくつながる  
そんな、タネをまきたい

「ホットスペース」と名づけられた場では、マラソンティアのひとりです。ここに、集まつた人々は、何かの義務や任務があつてきた人たちがたくさんつくりたかったという。

「大きな企画、たとえばあいこさんの講演会、ケロボンズのコンサート、映画の上映会など、それぞれがバラバラにあって参加した人が個々に帰つて行く……、それじや人はつながらないでしょ。でも、それをつなぐ小さな歯車があると、大きな歯車も運動していく具合に、みんながいつしょに動き出す。そういう連の流れができる。そこにはいる人たちが歯車となり、潤滑油になり、セッションのように、フェスという場をつくつていくんです。

今回は、ぼくも仕事ではなく、自分の街に、何か貢献できないかという思いで参加したボランティアのひとりです。ここに、集まつた人々は、何かの義務や任務があつてきた人たちがたくさんつくりたかったんだと思います。だからこそ、たまに、ちょっと揉みほぐしながら子育ての話をしたり、タロットをきつかけに自分の話を

したり。なにもなくて「お話ししましょう」っていうのは難しいけど、何かツールがひとつあるとつながりやすくなる。やる方はプロじゃなくともいいんです。

「お子さん、何歳ですか? 2歳! あー、大変だわ、うちの子もう歳、うちはぐちゃぐちゃだったもの……」ってほら、マッサージを介して今、出会つたふたりが、子育ての井戸端会議をはじめられるでしょ!」

### 声を掛け合うことができるつながることができる

タネをまくようにな。そのタネが生活のなかでまったく別の場面で、たとえば公園で「もうくたびれちゃった」ってほかのお母さんにつぶやくとか「うちに、お茶のみにしない?」って声を出すような、芽を出すような……それがフェスのような大きなイベントにじつは大事なんです」

個人的にふらつとやつてきたあいこさんの講演会やイベントが、共有されてつながっていく。「こんな風に、自分の子育てのことを話していくんだ。提供するほうも、されるほうも、あ、こんなふうに自分の子育てのこと話していくんだ。という個人的経験をつんでほしかった。思いのある人の心に残ります。

石飛さんのことに対する思いはつきそうにない。実際、こどもみらいフェスからつながるいろいろな関連イベントもその後、おこなわれてきた。また、近々、第二回のことどもみらいフェスのキッチンオフ集会もおこなわれるという。石飛さんのタネまきは、季節をとわず、春夏秋冬、一年中、いまでも続いている。



子育てを、個人のことではなく、地域のこととしてとらえる。  
子育てが大変な時代だからこそ  
わかりあいたい、  
分かちあいたい気持ちちは  
思いのある人の心に残ります。  
だから、  
フェスを継続した活動にしていきたいんです。



今回の企画の言い出しちゃでもある実行委員の石飛智紹さんと、小学2年生の長女、小学1年生の次女、そして4歳の長男という3人の子どもたち。

\*

子育てを、個人のことではなく、地域のこととしてとらえる。  
子育てが大変な時代だからこそ  
わかりあいたい、  
分かちあいたい気持ちちは  
思いのある人の心に残ります。

だから、

フェスを継続した活動にしていきたいんです。